

## L01a 2003年の火星：2つの共同観測の総括的報告(続)

中串孝志(京大人環)、安達誠、伊賀祐一(月惑星研究会関西支部)、時政典孝(西はりま天文台)、鳴海泰典(九州東海大学)

2003年の火星接近は史上最大の「超」接近であったこともあり、学界のみならず一般にも大いに火星フィーバーをもたらしたが、今回の接近に臨んで、既に2002年暮れから複数のプロアマ連携の共同観測ネットワークが観測を続けてきた。前回の日本天文学会2004年春季大会に於いて我々は、2003年観測期前半(2002年10月18日から2003年8月31日まで)に観測された諸現象について、西はりま天文台火星共同観測(NHAO-MCO)および月惑星研究会(ALPO-Japan)に大量に寄せられた優秀な画像アーカイブに基づいて、主として形態学的見地からの報告を行った(Nakakushi et al., 2004, submitted to PASJ)。

我々は今回、2003年後期の諸現象について同様の報告を行う。対象期間内には、前半に観測された2例のダストストームに起因すると思われるダストがほぼ南半球全域に広がっている様子が観測されている。これが南極冠の縮小にも影響を及ぼしているものと推測される。そのような中、3例目となるダストストームが12月に観測された。小規模な砂塵と思われる増光現象も幾つか報告されている。さらに、従来観測されなかったような薄い氷晶雲についても多数報告がある。これらの地域的な偏りを明らかにするためには、このような事例報告の蓄積がさらに必要である。また今回は、全観測期を通じた現象についての報告も行う。2001年に予測が成功し注目された「閃光現象」は、最有力候補とされた日・地点は悪天候により観測できなかったが、他の候補日・地点にもそのような現象はdetectされなかった。北極雲の分布には経度非対称性が明瞭に見られているが、これは熱的な大規模波動の現れと解釈することができる。先述のダスト粒子の増大による南極冠の縮小についても考察する。